令和４年度　第３回滋賀県公立大学法人評価委員会開催結果（概要）

日　時　　令和４年７月１４日（木）
　　１３時５５分～１５時５５分
場　所　　大津合同庁舎　７－Ａ会議室

【出 席 委 員】　浅田委員長、秋葉委員、中田委員、山本委員
【事　務　局】　小林私学・県立大学振興課長、他関係職員
【県 立 大 学】　廣川理事長（学長）、宮川副理事長、髙橋理事、安原理事
　　八里事務局次長、他関係職員

開会

〇委員会の進め方について

・委員会の進め方について、事務局から説明

【議題】

１　令和３事業年度における業務の実績に関する評価について

・追加説明事項について、大学から説明
・論点整理資料の修正について、事務局から説明

（委員）　SDGs関連の内容について、「Ⅳ」評価で良いと思っている。前回大学に説明いただいた具体的な数字も入っているため、最終的に皆様により理解していただけるようになったのではないか思う。アンケートの取り方や見せ方は、取組に直接関わってない方にも伝わるよう行っていただきたい。

（委員）　なぜ「Ⅳ」にしたかという具体的な内容を説明いただき、基本的には外部に対して説明する上で数値的に伸びているというところをはっきりと記載している。非常に重要な内容だと思うので、「Ⅳ」評価で結構だと思う。

（委員長）　事務局案について、その他項目についても原案の通りとしてよろしいか。

（異議なし）

・事務局から評価結果案の説明

（委員）　不正経理案件について、再発防止策の策定とともに、教職員のコンプライアンス意識の向上に向けた取組が求められているが、施策策定だけが特に取組が求められるわけではないと思うので、実行についても、特に強調していただきたい。

（事務局）　策定だけではなく実行が大事だと思うので、御指摘に沿った修正を加えたい。

（委員）　特記事項の高評価のところを概観すると、県立大学の存在意義や戦略に沿った内容を高評価としている。例えば、SDGsやICT、地理的なところで、やはり真ん中に大きな湖があると移動距離が増え難しいと思う。けれどもそういった点にも取り組まれ高評価になっている。

地域人材についても、大学の教育事業に対しての充実といった面に今年は実はすごく取り組まれたいい点ではないか。コロナ禍にあっても更に取り組まれている点については、全体評価のところで少し触れてもいいのではないか。

（事務局）　御指摘いただいたSDGsや地域人材の育成は、開学のときから大学が備え守ってきたDNAとも言える。もう一点、ICTについても、平成29年度に地域

人の未来情報研究センターを立ち上げ、精力的に研究や人材育成に取り組まれている。大学の理念といったところを体現しながら、取り組んでいるということについては御指摘も踏まえ、どのように盛り込めるかを検討させていただきたい。

（委員）　全体のバランスについては、よく取りまとめられている。さらにもう少しわかりやすくできないかという点で２点あり、１点目は、質問でもあるが、コロナ禍で体験ができなかった学生に対する取組のところで、新システムであるLMS（ラーニング・マネジメント・システム）を利用すると、学生一人一人のポートフォリオマネジメントのようなことができるようになっているのか。

コロナ禍でとりわけ３年生は、リアルアクションが全然できず、就職のときに学生時代に力を入れたことをPRするネタがないことは、全国的にもよく言われているが、例えばポートフォリオマネジメントで、学生に対する取組として厚くできそうとか改善の可能性があるとしたら、触れていただけると、より今後の取組を期待する事項としてポジティブに書けるかと考える。

２点目は不正経理で、先生方が教育を実施する際、例えば科目的に使いづらいとかそもそも原資があまりないとか、隠された背景や課題があるのではないかという点が気になっている。

評価委員会として知事に対しても申し上げることができるということを考えれば、例えば、資金が足りないのであれば、もっと手厚くすることのプライオリティを上げていただきたいですし、あるいは実務的な課題があるのであれば、そこを変えていただければよいのではないか。書きぶりは変更しないにしても、この事案からコミュニケーションなり未来に向けての問題提起的ができればいいのではないか。

（大学）　LMSについては、本格的に活用するのはこの秋からになるので、コメントいただいた点は十分我々も参考にさせていただき、活用方法を考えていきたい。

不正経理事案については、平成26年度のときに、制度的に使い勝手が悪

いのではないかといった問題も含め、財務課と教員とで年に１回意見を交換する場を設けて、問題点や改善点の発見に努めている。ただ、時間が経っているため、今回の事案も含め、もう一度原点に立ち返り検討できればと考える。

（委員）　不正経理の書きぶりについて、教員が学生を巻き込んだ事実を、簡潔に表現してはどうか。

（事務局）　今の御指摘を踏まえ、内容について今一度検討させていただく。

（委員）　２ページの上から６行目、「年度計画は達成できなかった」と言い切ると全然できていないような印象を抱くが、実際には取組はしたが、十分にはできてなかったという意味だと思うので、表現の工夫はできないか。

また、早い段階の達成を求めても、年度が変わっているため、どうすればいいのかがあいまいになるため、こちらも表現を工夫することはできないか。昨年度の内容で不十分だったことを、今年度も続いて達成できるまでやりなさいと読めるが、年度ごとの達成評価という枠組みでうまく収まるようにしてもらいたい。

（大学）　不正経理事案については、昨年度の段階では調査中であり、我々の令和３年度計画の実績評価の中では触れていない。

今年度になって、不正が認められたため公表した。評価委員会の評価に当たっては、このような背景をご理解いただきたいと考えている。

（委員）　事務局としての考え方はどうか。

厳密に考えれば昨年度の実施計画に対して、実績報告を受けてそれを自己評価に対して評価委員会が評価するので、昨年度の計画に記載されている部分に関しての評価というのは、今言われた厳密な意味での評価だと思う。

報告書に記載することが適切かどうかについて、今回書かなければ来年度という話になる。評価委員会の開催時期が大学からの公表があった後の

ため、知ったからには触れないとならないという気持ちもあり入っているが、事務局はどのように考えているか。

（事務局）　評価の対象は昨年度のことではあるが、一方で、特に不正経理事案につきましては平成27年に続いて、２度目ということで大学から評価委員の先生方にも御報告をいただいている。評価とは直接切り離すような形、例えば特記事項的な形で触れておくというのは、適正というかそちらがよろしいかという考えでいる。

（委員）　一度その方向で整理して欲しい。書きぶりとして、要するに、今年度に入ってわかったことであると思うが、重要なことなのでここで付記しますといった形になると思う。昨年度の評価という枠組みからは違う部分で、しかし重要事項としてわかるようにしていただくのがいいかと思う。

（委員長）　何点か意見をいただき、修正が必要な箇所があるが、ここで全てを修正することは難しいので、次回修正案を出していただき、そこで確認するということにしたい。

（事務局）　本日頂戴しました御意見をしっかりと整理し、次回、修正案について御議論をお願いしたい。

２　第３期中期目標期間終了時に見込まれる業務の実績に関する評価について

（委員長）　評価委員会に求められているのは見込評価で、６年経ったときに、達成できそうかどうかということを、判断するよう言われており、判断が難しい。

事務局案のコメント欄では、「評価できる」という書き方をされているが、これは過去のことで、未来のことをどう書くのかが課題だと思っている。評価委員会としては、達成が見込まれるという書き方をしたいがどうか。その書きぶりによってずいぶん表現が変わってくると思っている。

４年間の実績を厳密に見るという立場では、事実だけ見ればよいが、見込評価の趣旨からすると、終了時に見込まれる業務の実績の評価を、評価委員会として行わなければならない。そこの意識の問題と、実際にコメントを書くときの書きぶりについて、事務局で一度整理いただいた方がいいと思う。感覚を委員の方と共有しないといけないので、見込み評価の難しさも含めて御発言いただければと考えている。

（委員）　２ページ目の50番、先ほどから話題になっているコンプライアンス関係で、令和３年度終了時点で、不正というのは特に公に発覚しておらず、現時点では見えているが見込みとして、判断に含めるか否かというところがある。

コンプライアンス違反の部分はしっかりと直してもらわなければいけない点は当然指摘するが、今後も不正が毎年続くという見込みがあるわけでもない。だから、厳しくするのかしないのかとかいうのも、見込みということの難しさがある。不正経理事案が起きたらもう当分ないだろうという見込みもあり、そもそも今年度書けるのか書けないのかという話も含め、結構悩ましい評価をさせられているなというところがあるが、委員の皆様の御意見を伺いたい。

（委員）　計画番号50番に関連し、不正経理について、法人の対応で評価させていただきたいと思っている点が１点。内部通報で、この案件が発覚したということで、適切な内部通報制度が運営できているという表れで、その点は非常に評価できる点だと思う。さらに、内部通報があった後、速やかに第三者の方も交えた調査をされている点も適切な対応だと思っている。不正のトライアングルという、不正が起こりやすい要素が３つあると言われており、「動機」・「機会」・「正当化」という３つが重なったときに、不正は起こりやすい。「動機」と「正当化」は、本人の問題だが、組織としては不正を起こしてしまう「機会」を許してしまう運営の仕組みになっていたということが反省すべき点かと思う。今回の案件も、アルバイトの勤務状況を組織として管理できていなかった、また監査で徹底できていなかったという点で「機会」があったと思う。法令遵守に基づく大学運営に少

し欠陥があったというところを少し強調されて書かれると、よいのではないか。こういった案件があればすぐ駄目かという問題もあるかもないが、組織として運営面の欠陥が表面化したという点を課題とするとよいと思っている。

（委員）　見込評価の位置づけが難しく、事務局から説明のあったとおり、次の課題に向けての課題の掘り起こしの役割も担うとすると、何をピックアップしてどこにフォーカスして、それを見込みでどう評価するのか等課題が多い。あえて厳しく全体を評価することが、ポジティブに効いてくるかという点には疑義がある。

次期の計画にパワーアップするのにどうすればよいかを考える動機とする際に、評価を下げるという方法に頼らなければならないのかという問題意識である。もう少し書きぶりで拾うとか、コミュニケーションを図り、次の目標に向けてという位置づけで使える方が、よいのではないか。

不正の扱いについて、今年度の評価とも絡むが、自己評価作成段階では、学内で協議中というステータスと理解する。とはいえ、県民の皆さんから見たら関心高いことではあるので、全く触れないことはないと思うが、どういう書きぶりにするのがいいのかというのが悩ましい。今、委員から重要なご指摘いただいている組織として防げるところは、きちんとした仕組みを作っていく必要がある。

（委員）　達成できる状況で「Ⅲ」がついているものについて、判断理由の中に、次のステップの芽が出ていたら、ぜひ記入されるとよい。芽がある見込みのもので、例えば１段階ぐらい評価をあげてもよいのではないかと評価委員会で考えた時に、そのステップの芽が、エビデンスになると思う。既に達成していることがたくさんある中で、次の芽もあるかなということを探していただくことがよいのではないか。既に上回っている場合も多くあるように見えるが、やはり同じで次のステップを描いているかどうか。そうするともう１つ上の評価が書けると思う。ただ、６年間という限られた期間の中、プライオリティ高くここは強みとして発揮していきたいというふうに法人が考えておられるのであれば、そこは次のステップの芽を書けば

いいのではないかと思う。

それから、不正経理については評価を下げなくてもよいのではないかと思う。先ほど委員の皆様がお話の通り、継続するものではないので、一番大事なのは、それを断ち切るシステムが出来上がるかどうかだと思う。それが立ち上がる過程について、しっかり書けるのであれば「Ⅲ」に戻してもいいのではないかと思う。

（委員）　基本的には見込評価はポジティブ評価でいいと思う。厳しく評価することで喝を入れるみたいな発想もあるかもしれないが、逆効果と思っている。

我々としては今までの実績を見た上で、この調子でさらに伸ばしてほしいというところをメッセージとして出せるのかというところがある。
計画達成が全く無理な状況になっているとか、今から回復も困難というようなはっきりした理由があれば厳しい評価というのはあるとは思うが、努力され順調に来ているものについて、昨年度こうだったからダメだという話ではないと考えている。

もう一つ重要な点は、３ページの46番について、設備等の改修更新の話が中期計画に入っていて順調にいかないということが理由に書かれており、実際問題としては厳しい問題だと思う。評価委員会として法人を評価する形になると、法人だけでは無理なところが結構あると思っており、「Ⅱ」がついた責任を県にもあるということがちゃんと伝わるような形にしたいと考えている。

法人にもちろん頑張ってもらうが、県も状況を把握し、役割としてしっかり受け止めないといけないといったうまくバランスが取れるようになればよいと考えている。

（委員）　入試関連については、県立大学は、すごく頑張っておられると考えている。出願状況をサイトで確認していたが、学部系は今の段階で志望者は増加しており、教育事業等の話を伺い、ここまでされていれば結果に繋がるだろうなと考えていたところ。

女子中高生向けの取組についても、反響があり志望をしてくれる子が増

えてきているのではないかなと思っている。これだけ地道に高大連携を行っていれば、志望者は集まると思っている。また、3.0倍の倍率は非常に高い数値を掲げていると思う。18歳人口が少しずつ減っているということと、この５年間、一般入試から年内入試にシフトが大きく変わってきているので、倍率が少し下がってきている。特に後期日程については厳しくなってきているとは思うが、それを慮っても、この倍率は非常にエクセレンスな数値と思っている。

また、高大連携のところで、主体性等の総合的な評価の導入について記載があったが、先生方に周知させ研修するというような一面があるということは評価できると思っている。

（委員）　中期計画７番について、この部分は、次期中期目標において、前期中期目標作成時から社会が大きく変わっており、大きなポイントになると考えている。

切り口が２つあり、まず社会人については、リスキリング・リカレントの養成が高まっており、県大の場合、工学系の学部を持っているというのが非常に強い。入学してくる学生さんに限らず、集中して学べるようなプログラム等を既に開講しているかもしれないが、少し戦略的に位置づけを持ち、最前線で活躍しているけど自分は現代に追いつけていないかもしれないと思っているような社会人が、プログラムを通じて、リスキリングできる科目が短期集中で開講されているとか、４年間通うという前提ではないプログラムがあっても、いいのではないか。実際に実行にうつすリソースは持っているのではないかと考えるので、社会人は、入学者選抜という範疇では捉えない。そういった、今後に向けた可能性を考えられたら良いのではいうのが１点。

今後、高校生に向けても高大連携がとても重要で、委員がおっしゃっているように成果が出ている表れだろうと考えている。全国的な傾向も推薦入試にシフトしており、半分ぐらいが第１希望で、推薦で固まっていく印象がある。学生のモチベーションもやはり違ったものになると思う。戦略的に学生たちの動向も見ながら、一般選抜重視より特別選抜で、本当に尖

った県大で学びたいという意欲ある生徒さんをキャッチアップできるよう戦略的な入試のチャレンジもあり得るのではないか。

（委員長）　次期中期計画向きの話になってきたが、入試というのは、世の中の制度が結構変わっていく。高校の新課程が変わるなどの様々な影響を受けながら、また、受験生の受験時期がどんどん前倒しになってきている傾向もある。そういった影響を敏感に感じつつ、でも失敗できないからかなり慎重にするしかないというのが入試なので、中期計画で６年先のことまで書いてしまうのはリスクが高いと考える。

入試に関して、今回の見込み評価に関して言うと、丁寧にやられており、実績も出されているという意味では、見込みとして順調にいっていると思う。ただ、次期の計画に書き込むというのは難しいだろうという印象は持っている。ある程度意欲的なことも書かなければならないが、書きすぎるのも危険という印象を持っているので、バランスよくやられたらどうかと思う。

今回はこの４年間を振り返って、かつ、６年達成を見込めるかを記載するということを盛り込み、事務局の方で、次回の資料作りはできるか。

（事務局）　次回修正した資料を提出する。

（委員）　関心高いと思われる項目に入試が上がっているが、事務局からの懸念を聞かせてもらいたい。

（事務局）　県の基本構想等に、リカレント教育等を項目として記載している。ただ、実際にどれだけ実績を残せているかということになると難しい部分があるため、サジェスチョンいただきたいと考え、ピックアップをさせていただいた。

また、18歳人口の減少についても、大きな課題と考えており、入試に関しても、受験者数の絶対数が減っていくような状況にあると考えている。次期中期目標にどう盛り込んでいくのかということを課題として認識しているので、関心の高い項目として取り上げた。

（委員）　通常、入試の場合はまず一つがマーケティング。それは先ほど上がっていた倍率の基準をどこに持っていくかっていう計算をしっかりしておかないといけない。どのような計算式があり、この3.0倍を出されているか等をもう一度見直された方がいいかもしれない。

次に18歳人口とそれからターゲットとなる地域の18歳人口。県立大学なので、地元にどんな貢献できるかが強いと思うので、地元占有率の適正的な数値を持っておくと、広報の方では戦略的にできるのではないか。それから進学率。高校の進学率を見ていただいて、滋賀は結構優秀な進学校が多いですから、そこで数値設定をされるといいと思う。

最後に、非常に難しいところだが、新入生の合格者追跡という調査がある。多くの大学はそれを４年生の卒業時にされようとするケースが結構多いが、１年の前期後期のリタイア率とかというところに指標を持たれるとよいのではないか。その辺りを指標に持っている大学は少ないが、中等教育から高等教育に移行（トラディション）できているかどうかを見るための一つの基準になると思う。入試から入試直後の大学の教育のところが繋がり、高大接続全体を見ることができるというふうに考えている。

（委員長）　今回のところは、この辺りで終えさせていただき、次回の委員会で時間をとりたいと思う。

〇閉会